2020年5月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第520号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

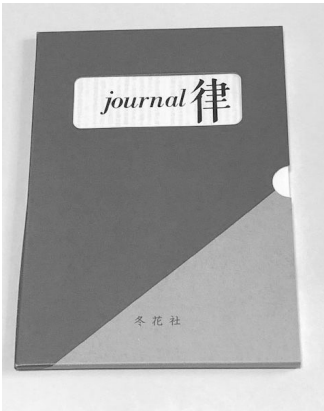
はじめまして、冬花社です

＊＊＊　////// ★☆★

法人化して15期目、幻の雑誌だった『ジュルナール律』を復刻、それから150冊ちかい本を出版

文・冬花社（とうかしゃ）　本多順子

冬花社の玄関に飾られている鍾馗の色紙



『復刻ジュルナール律』（2002年6月　冬花社刊）
ISBN978-4-925236-02-4
定価2200円（税込み）

いま、わが社（わが家）の玄関には、鍾馗を描いた色紙が掛かっている。

新型コロナウィルスの猛威で出かけることがめっきり減って、少しずつやっていた身辺整理が加速。めったに開けることのない戸棚を片付けていたら、紙魚のついたたとうの中からこの色紙が出てきた。

長い髪を逆立て、大きな目でなにかを睨みつけている鍾馗様と一緒に「退疫鬼除魔神」の文字が書かれているではないか。いま、この色紙を見つけたことは偶然ではないと思えた。

「鍾馗様、新型コロナウィルスをなんとか宥めてください」

50年近く前、青春放浪の続きのようにして福島県福島市に住んだ時、お世話になったのが、『福島県史』編集長の宗像喜代治氏だった。

その氏が長男の初節句に自ら描いてくださったのがこの色紙であることなど、久しぶりに当時のことをいろいろ思い出した。

宗像氏は「近代文学」の同人（？）だったと思う。福島県の歴史にも詳しく、会津や喜多方に何度か連れていってくださったし、あちこちで行われていた遺蹟の調査発掘（東北自動車道建設の真っ只中だった）をしている考古学の人たちを紹介してくださったりした。

初めて触った縄文の火焔土器、初めて見た登り窯、万葉集に詠われた場所や史蹟の探訪……、宗像氏に導かれての初めての体験がたくさんあった。

その上、短歌を作ることを勧められ、途切れ途切れながら今日まで短歌にかかわることにもなった。

「どうして出版社をやろうと思ったのですか？」とよく聞かれる。聞かれるたびに、どうしてだろうと考えるのだが、いまだに明快な答えが浮かばない。が、20代に東北・福島で知った地方の文化や歴史、生活の豊かさ、面白さが、遠因としてあるような気がする。

◇

冬花社は法人化して15期目に入った。法人化してなどと言うと聞こえはいいが、傍から見ればおままごとをやっているくらいにしかし見えないのではないかと思う。

本を作ることについてはある程度知っていたつもりだが、営業は全くやったことがなかったし、流通の仕組みも実はよくわかっていたわけではない。

冬花社という名前は、二男が通っていた保育園に編集や校正を仕事とするお母さんが2人いて（私はフリーのライターやテープ起こしをしていた）、グループを作って助け合っていこうということになった。女性が働くことが今ほど当たり前ではなかったから、「冬でも花を咲かせましょう」と意気込んで付けた名前だった。

その後、一人は東京に引っ越し、一人は夫がやっている出版社を手伝うことになり、グループは解散となった。そして鎌倉にいる私が冬花社の名前を使っていいということで、そのまま引き継いでいる。

カラオケで、冬花社の社歌を歌いますと前置きして大川栄作の「さざんかの宿」を歌う友人がいる。確かにさざんかも冬の花。年令のせいもあってか「冬でも花を咲かせましょう」より「さざんかの宿」の方が気分的にはしっくりくるかなどと思うようになった。

ところが5年ほど前、ある著者から「冬花社という名前は格調高いですね。川端康成ですね」と言われて、私は「？？？」。

聞いてみると、東山魁夷が川端康成に贈った「冬の花」という名画があり、それは京都・北山杉の絵で、初版『古都』（新潮社、1962）の口絵にはその

絵が使われているそうだ。

実物を見ていないのだが、川端康成も鎌倉の人だから許されるかと思いつつ、まじめな顔で格調高い！説明をすることもある。

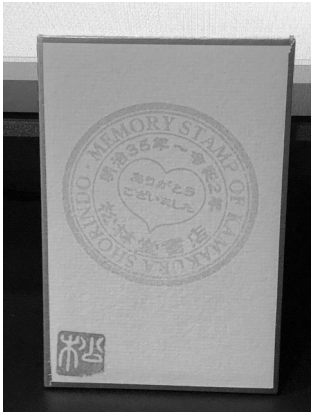
◇

冬花社の出発となるのは、2002年に出版した『復刻 ジュルナール律』。前衛短歌が停滞しかかっていた昭和39～40年に7冊発行された雑誌で、現代短歌史に登場するものの全冊通して読むことが出来ない幻の雑誌だった。なによりも短歌をかじっていた自分が読みたくて、あちこち探していたら、親しい先輩歌人が保存していて復刻が実現した。

予算が少ない中、箱をつけることになって、ボール紙の裏を使って1色刷りで見栄えよく作るアイディアを出してくれたのは、印刷所の営業の人だった。そのほかにも、印刷所の人にはたくさんのことを教えてもらった。

そんな足元もおぼつかない冬花社が今まで続き、150冊ちかい本を出版することがどうしてできたのだろうか、しみじみ考える時がある。

多分、ひとつは鎌倉という土地である。鎌倉は東京通勤圏だが、東京にのみ込まれない文化や生活がある。個々に特色ある書店が、他の街より残っている。鎌倉に特化した本でも一定数の読者がいる。



閉店した鎌倉駅前の松林堂書店の色紙

もうひとつは、デザイナーや校正者や印刷所や取次や、仕事上でかかわる人たちとのよき出会いに恵まれたおかげだと思う。

今後、新型コロナウィルスは社会にどんな変容をもたらすのだろうか。あと何年、仕事が出来るだろうか。年相応に、ゆっくりと、丁寧に、本を作っていけたらと思っている。

◇

最後に、この3月31日に閉店した鎌倉駅前の松林堂書店のことを。創業は明治35年。「松林堂の歴史を残しておきたいですね」と言ったら、「資料がないし、親があまりそういう話をしなかったのでわからない」とのこと。

そしていただいたのが、縦9センチほどの小さな色紙。真ん中にスタンプが押してあり、

MEMORY STAMP OF KAMAKURA
SHORINDO
明治35年～令和2年
ありがとうございました

と刻まれている。

ご主人曰く、「松林堂の記録はないですが、のちのち皆さまに、あんな本屋もあったなあと思い出していただければと作りました」

＊

【ほんだじゅんこ／冬花社（とうかしゃ）代表】

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

弊社のホームページでは半年前までの本誌バックナンバーをアップしております。
また「新刊ダイジェスト」のバックナンバーもたくさん掲載してます。
アドレスは下記の通りです。右記のＱＲコードもご利用ください。
URL：http://neil.chips.jp/chihosho/

『原発の断りかた －ぼくの芦浜闘争記』●柴原洋一著

三重県熊野灘に面した南島町（現南伊勢町）と紀勢町（現大紀町）、陸の孤島ともいえる小さな漁村で、37年もの年月をかけて原発開発を阻止した住民運動の記録である。

中部電力（以下「中電」）が熊野灘への原発建設計画を表明したのは1963年のこと。県の後押しで両町議会が誘致を決議、二町にまたがる芦浜に決定する。地元漁協と県漁連は強く反発し、長い闘いに入る。3年後、中電は密かに用地を買収し、後に首相となって原子力予算を成立させる中曽根康弘議員ら国会議員団を視察に送り込むが、2千人規模の海上デモで阻止する。漁民30人が逮捕される事件となったことで、かえって住民の結束を強固なものにする。中電から巨額な懐柔資金が投下され、反対住民への暴力沙汰も起こる。しかし、反対派を擁立する町長選挙、東大にまで出かけて科学者に学ぶ勉強会などで原発の本質を見抜き、知恵と勇気で立ち向かう。先祖伝来の海を壊さずに次代に受け渡す、子どもたちを守れと立ち上がった母親たちの力も大きかった。最終局面は、県有権者の過半数を遥かに越える81万余の「命の署名」。当時の北川知事は白紙を表明、中電も計画断念を公表した。だが、長い戦いは地域に大きな亀裂をもたらし、買収された土地は中電が所有したままだ。その意味で闘争はまだ終わっていない。故郷は故郷のままで、ただ平穏に暮らしたい。その一心で金と権力の不条理と戦った住民の姿から、大きな勇気を与えられる。

◆1500円・四六判・219頁・**月兎舎**・三重・202002刊・ISBN9784907208165

『言語伝承と無意識 －精神分析としての民俗学』●岡安裕介著

本書の目的は、クロード・レヴィ＝ストロースからジャック・ラカンへと続くフランス現代思想の構造論的方法を用いて、現代日本における日本文化の特性を解き明かす、ということにある。序章おいて著者は、レヴィ＝ストロースを継承したラカンの言語構造論的方法をもとに、個々の対話者を超えた〈語らいにおける言葉の交換法則〉を日本文化の特性理解の基軸とすることを明示する。とは言え、ラカンが直接現代の日本文化の構造分析を詳細に行ったわけではない。そこで著者が手がかりとしたのは、柳田國男から折口信夫にいたる日本民俗学の方法である。中でも折口信夫の言う〈古代論理〉から著者は大きな影響を受けており、その後継とも言える〈言語伝承の図式〉という概念を導き出すのである。それは、〈まれびと〉概念で捉えられた来訪神がもたらす詞章（ことのは）とそれを迎える村人の返答の儀礼に見られる、言葉の交換と伝承のモデルとなるものである。この〈言語伝承の図式〉こそ、著者が日本文化の原型とするものである。折口信夫がそこに国文学の起源を見出したように、著者は、古代から日本人があらゆる文化領域で反復してきた基幹構造をそこに見る。後半において著者は、折口信夫の大嘗祭研究や貴種流離譚、ラカンが言うところの、言語（文化）の起源としての〈エディプスの三角形〉、モースに始まる贈与論といった文脈にこの〈言語伝承の図式〉をくぐらせて鍛錬し、その精度を高めていく。

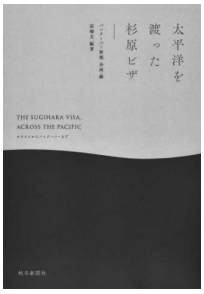
◆3200円・四六判・395頁・**洛北出版**・京都・202003刊・ISBN9784903127293

『歴史にいまを読む －熊本・永青文庫からの発信』●稲葉継陽著

本書は中世史家による研究余滴（エッセイ）である。熊本大学永青文庫研究センターの所長であり、熊本被災史料レスキューネットワーク代表も務める。同センターは肥後細川家文書の基礎研究を推進する目的で2009年に創設された熊本大学附属機関。本書は、研究活動のかたわら、展覧会での講演や図録解説の執筆による啓蒙活動、さらには熊本地震によって被災した文化財の救出および保存活動に精を出すなど、多忙な著者が日々体験した事柄を雑誌や新聞に寄稿したものをまとめたもの。タイトルのとおり、「いま」をよりよく生きるには歴史的脈略の中に現在を位置づけることが肝要。そのための学問として歴史学が存在する。歴史家としての著者の自負心を読者は行間から読み取ることができる。今年の大河ドラマがらみでいえば、『兼見卿記』の記主・吉田兼見は、秀吉を忖度して信長を殺害した光秀の評価を書き直したが、改ざん前の原本は処分しなかった。昨今の政治家や官僚はどう思うのか。著者の恩師は去年亡くなった藤木久志氏。戦国社会史の第一人者として多大な功績を残された人物。師の教えが強く印象に残る。「評論家たるな、クリエーターたれ」。創造的なものを生み出すには、先学の業績に引きずられることなく古文書などの歴史資料の解読に沈潜することが重要。どの歴史資料を選択するかはその人自身の生きざまに関わってくる。この歴史家の本分を忘れた研究者が近年増えていると著者は危惧する。

◆1091円・新書判・238頁・**熊本日日新聞社**・熊本・202003刊・ISBN9784877556013

『太平洋を渡った杉原ビザ －カウナスからバンクーバーまで』●高橋文著



第二次世界大戦中、リトアニアの在カウナス日本領事館で、領事代理・杉原千畝は2139枚の日本通過ビザを発給した。ナチスドイツに迫害されていたユダヤ系避難民の亡命を手助けした「命のビザ」である。彼らの最終目的地は米国、オーストラリア、パレスチナ、南米の国などがあるが、カナダもそのひとつで206人が渡ったとされ、ポーランド人が大多数を占めている。日本の訓令に反した発給のためか、杉原の功績が讃えられるのは戦後かなりの時を待たなければならなかったが、カナダには彼らの子孫が多く存在し、杉原に敬意を表し、孫に千畝の音読みで“センポ”と名付けた者もいるほどである。杉原の生誕地、岐阜県八百津町にある杉原千畝記念館と交流のあるカナダ在住のジャーナリストの著者は記念館からバンクーバーに住むビザ受給者や子孫からのメッセージをという依頼を受け、ビデオを収録し寄贈した。カナダの日本語新聞「バンクーバー新報」に連載した子孫の取材記事をまとめたのが本書。未発表の三家族の逃亡体験談も加えた。逃亡当時は10歳未満から十代だった彼らも取材時には七十代から九十代になっていたが、多くの人々が「あのビザがなかったら私は今ここにいない」と語った。子どもには旅の理由はわからなかったが、不安を悟られまいとする親たちの苦労もしのばれる。暗いニュースの多い昨今、命をつないだ杉原の勇気や平和について、また戦争の残酷さについても深く考えさせられる。

◆2000円・A5判・324頁・**岐阜新聞社**・岐阜・202003刊・ISBN9784877972820

『統合失調症の過去・現在・未来 －中井久夫講演録』●中井久夫・考える患者たち・高 宜良・ 胡桃澤著

統合失調症という病気について深く思索を巡らせてきた精神科医・中井久夫の著書をテキストとして、医師と患者がともに理解と学びを深めていくという企画〈中井久夫と考える患者シリーズ〉は、全4巻がすでで刊行されている。本書はその補巻ともいうべき内容となっている。シリーズ第1巻『統合失調症をたどる』では、この病気の前兆から回復までの経過を辿る。第2巻『統合失調症をほどく』では、様々な症状への診断と治療について見ていく。第3巻『統合失調症は癒える』は、信頼と希望を生む治療関係の在り方について、第4巻『統合失調症と暮らす』は、患者たちが生きにくい日本において、いかに働き、いかに棲み、いかに生きるか、を考えていく。補巻となる本書では、冒頭に置かれた中井の講演『統合失調症の過去・現在、未来』で、統合失調症という病気とその治療や社会の対応の歴史を振り返り、日本において精神分裂病から統合失調症へと病名が変わったことの意味について考えが巡らされている。この病の経過や細かな対処法、回復への道筋などについても言及がなされている。この中井の講演は、2003年に兵庫県尼崎市保健所主催「第十七回こころと健康のつどい」にて行われたもので、これまで未発表であった。本書が初出となる。第2章では、本講演の内容を受けて〈考える患者たち〉が実体験を語っていく。第3章において本講演の理解を深めるための、医師と〈考える患者たち〉との対話がQ&A方式で記述される。

◆1800円・四六判・180頁・**ラグーナ出版**・鹿児島・202003刊・ISBN9784904380925

『里帰りした「玉野市電」』●玉野市電保存会著

岡山県玉野市は瀬戸内海に面した港町です。四国に向けて船が出る宇野と、造船所のある玉。この隣り合う二地区を、かつてわずか全長4.7キロのミニ鉄道が結んでいました。その名も玉野市電気鉄道。地元では「玉野市電」などの愛称で呼ばれました。残念ながら路線自体は1972年に廃止となっていましたが、一部の車輌は香川の高松琴平電気鉄道に売却され、とりわけモハ103号(琴電では760号)車は2006年まで走り続けました。それを知った玉野市民有志により「玉野市伝保存会」が結成され、ついには引退したその車両を譲り受け、玉野市内に「里帰り」させることに成功しました。本書はその里帰りの顛末と、玉野市電気鉄道の資料や証言を一冊にまとめたものです。

引退後の車輌を引き取るには多額の費用に加えて、その後も継続的なメンテナンスを行わねばなりません。市電保存会では保存費用を募金活動などで集めるとともに、積極的にイベントを開催するなどして市電「里帰り」の機運を高めてきました。そして交渉の末、市有地を保管場所として提供してもらうことにも成功しています。その市民の熱意を示すかのように、在りし日の玉野市電についての証言でも当時を懐かしむものが多く、玉野市電がかつては街のシンボルとして愛されていたことが伝わってきます。開通時の新聞記事などの資料や図面、廃線跡の現状などマニア的な興味を惹く記事も多く、玉野市電について知るにはうってつけといえるでしょう。

◆1000円・B5判・47頁・**吉備人出版**・岡山・202001刊・ISBN9784860696023

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2020年3月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆Radiation Environment and Medicine Vol.9 No.1　弘前大学出版会編　A4　45頁　1100円　弘前大学出版会［青森］　978-4-503-22007-3　20/03

◆S－style 03 vol.663 プレスアート編　298mm×232mm　141頁　450円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22003-5　20/03

◆S－style 04 vol.664 プレスアート編　298mm×232mm　162頁　450円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22023-3　20/04

◆GREEN REPORT 483 2020年3月号　廣瀬仁編　A4　192頁　2546円　地域環境ネット［埼玉］　978-4-909864-15-4　20/03

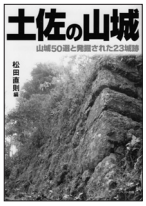
◆**響き合う街で** No.92 2020年2月号　やどかり出版編　B5　60頁　1200円　やどかり出版［埼玉］　978-4-503-21999-2

売行良好書

期間：2020年3月15日～4月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(2)『富士山世界遺産登録へのみちのり』1800円・ぶんしん出版　(3)『土佐の山城』2000円・ハーベスト出版　(4)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(5)『よみきかせのきほん』750円・東京子ども図書館　(6)『原発の断りかた』1500円・月兎舎　(7)『チョウが語る自然史』2800円・南方新社　(8)『沖縄で新聞記者になる』1200円・ボーダーインク　(9)『ミツバチと暮らす』1700円・無明舎出版　(10)『本を売る技術』1600円・本の雑誌社　(11)『石牟礼道子＜句・画＞集　色のない虹』1900円・弦書房　(12)『シルバーが教えてくれた命の大切さ』2000円・リーブル出版　(13)『石牟礼道子全詩集　完全版』3500円・石風社



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『昭和プロレスマガジン　５１』909円・昭和プロレス研究室　(2)『本を売る技術』1600円・本の雑誌社　(3)『本の雑誌　４４２号』1000円・本の雑誌社　(4)『着せる女』1650円・本の雑誌社　(5)『東京かわら版　３月号』545円・東京かわら版　(6)『今日は誰にも愛されたかった』1200円・ナナロク社　(7)『甦れ！首里城』1000円・琉球新報社　(8)『つくる たべる よむ』1700円・本の雑誌社　(9)『奥多摩登山詳細図（東編）』900円・吉備人出版　(10)『武士の拠点 鎌倉・室町時代』3000円・高志書院

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『まぁ映画な、岡山じゃ県３』1600円・蜻文庫　(2)『昭和の武人　櫻公路一顱先生の教え』1500円・壮神社　(3)『日本産鳥類の卵と巣』2500円・まつやま書房　(4)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(5)『歴史にいまを読む』1091円・熊本日日新聞社　(6)『レシピ集　おごっそうの玉手箱』1800円・山梨日日新聞社　(7)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(8)『日本廃村百選』2000円・秋田文化出版　(9)『新・免疫革命』2000円・鉱脈社　(10)『自然治癒はハチミツから』2000円・鉱脈社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

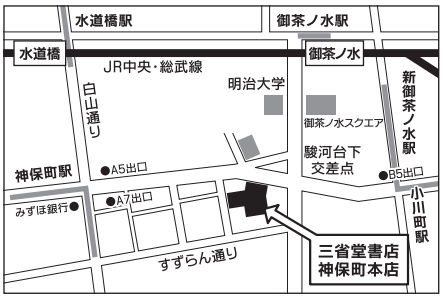
▼新型コロナウィルス感染拡大のため「緊急事態宣言」が東京はじめ７都府県に４月８日に出され、かなりの書店が営業停止になっています。百貨店やショッピングセンターの中の書店などが多いのですが、営業時間短縮のお店も結構あるようです。また、出版社でも、自宅待機や時短営業の社も多々でていますが、在庫品の物流は継続されている社がほとんどです。しかしながら、この数日の都心の状況を見ますと、これから１ケ月間はどうなるかわかりません。

▼当社は、いまのところ（4/17現在）、通常通り営業しています。時差出勤や少人数体制とはなっていますが、大手取次が稼働している限り、出荷を続けるつもりです。心配なのは、社内スタッフに感染者が出た場合で、その時は営業継続が困難になる可能性があると思います。その場合はホームページなどでお報らせします 。

▼コロナ感染で緊急事態宣言が最初に出た北海道の温泉ガイド本を出している出版社、あざらし舎（札幌）さんからは、「道東取材旅行に行ったものの、摩周湖、屈斜路湖や知床のウトロ温泉などはゴーストタウン状態で、人がいないので取材はしやすくて助かるのですが、大箱の温泉ホテルはどこも従業員を解雇して、稼ぎ時のゴールデンウィークまで休業の張り紙が！！」…という便り。会津若松の出版社社主は、「東京は怖くて行けない」と、いつもは楽しみにしている会合もキャンセルとなりました。「緊急事態宣言」直後に、中国の、北京にあるグローバル科学文化出版社の劉社長に「東京も今週から外出自粛のようです」とメールすると、「少し遅れの感があるが、正しいと思う。ほかに良い方法がないですから。指導者の決断力と国民の忍耐力、自律性が国の運命を決める。日本はこの難局を必ず乗り越えると信じます。」という励ましのお便りがありました。

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM ～ 8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。